科目ナンバリング	U-LAS55 10001 SB31						
授業科目名 <英訳>	多文化教養演習 ：見・聞・知@京都「受容から発信 へ」 Seminar for Multicultural Studies : Watch, Listen and Learn @ Kyoto - From Accepting Various Cultures to Transmitting Your Own.			担当者所属 職名・氏名	国際高等教育院 教授 河合 淳子 国際高等教育院 准教授 家本 太郎 国際高等教育院 准教授 韓 立友 国際高等教育院 特定准教授 若松 文貴		
群	キャリア形成科目群	分野(分類)	多文化理解		使用言語	日本語及び英語	
旧群		単位数	2単位	時間数	30時間	授業形態	ゼミナール（対面授業科目）
開講年度・開講期	2024・ 前期集中	曜時限	集中 集中	配当学年	全回生	対象学生	全学向

[授業の概要・目的]

本授業は、京都大学が実施する「多文化共学短期[受入れ]留学プログラム（通称：京都サマープログラム）」を核とする本学学生対象の授業である。
本演習の目的は、ここ京都大学において、世界中から多様な学生が集う環境の下、本学の学風および先端研究に触れること、日本社会の課題、伝統、文化、経済等の理解を深めると共に様々なアプローチを学ぶこと、そして、これにより今後のさらなる国際的活動への礎を築くことである。
具体的には、本学大学間学生交流協定校・学術交流協定校から海外学生を受入れ、彼らと共に（１）学術講義、（２）日本語教授実習、（３）本学学生との共同学習・討論会、（４）実地研修を行う。

特徴は４点ある。（a）多様性の重視：東アジア、ASEAN, 欧州、アフリカ、北米の20を超える大学から、専門を問わず海外学生を受入れ、本学学生との共学の場を提供する。これほど多様な背景を持つ学生が一堂に会する短期プログラムは、世界に類を見ない。(b)「対話」を通じたアプローチ：教員－学生間、学生－学生間の「対話」を通じ、多様な学問領域を扱う。特に、対象を捉え、問題に取組むアプローチの習得に重点を置く。議論の場では、様々な意見を受止め、展開する。（c）地域に根差したプログラム：伝統と創造が共存する土地柄を生かし、文化体験や企業訪問を行う。（d）学生主体：教員の監督下で企画・運営に本学学生が携わり、運営力・リーダーシップを涵養する。

[到達目標]

１）各国・地域の文化および社会状況、さらには日本文化、日本社会の状況についてのより深い理解。
２）理系トピックを含む、学際的アプローチへの関心と理解。
３）多様な文化的背景を持つ学生が共に学ぶことへの関心。意見交換や合意形成の技能。
４）日本語教授の経験、それを通しての日本の文化・社会への理解。
５）学外研修・文化体験を通して、実体験に基づく日本文化、社会状況、日本的組織の特徴等への理解。
６）研究室訪問による最先端の研究動向に触れることによる、学生個々の進路の選択肢の拡大。
７）討論会準備、学外研修の企画、文化体験の計画を行うことによる、企画力、リーダーシップの涵養。

[授業計画と内容]

当プログラムには別途申し込みをする必要がある。
募集要項・時間割・講義一覧の準備が整い次第、KULASIS上などで案内する。

■プログラム内容
１.7月中旬～8月上旬：京都サマープログラム（於、京都大学）

多文化教養演習 ：見・聞・知@京都「受容から発信 へ」(2)へ続く↓↓↓

（１)学術講義
学際的なプログラムを象徴する講義群を海外学生と共に学ぶ。

以下は2023年度例：
提供言語（English/Japanese）、キーワード、「講義タイトル」、（講師氏名）

①English　ジェンダー「日本のフェミニズム運動はどこがユニークなのか
―グローバルジェンダー史の重層的多様性」（落合 恵美子）
②English　霊長類学「ボノボのメス優位・中心社会の秘訣を探る」（徳山 奈帆子）
③English　政治経済学「日本の「失われた30年」の政治経済学」（関山 健）
④English　科学技術「気体の時代の科学技術
―「かすみ（水蒸気、空気）」を食って生きることは可能か」（北川 進）
⑤English　日本近代外交史「幕末の外交儀礼から、日本の近代外交の幕開けを考える」（佐野 真由子）
⑥Japanese 歴史学「歴史からみる日本社会の多様性」（張 子康）
⑦Japanese 社会言語学「日本語の社会言語的諸相」（家本 太郎）
⑧English　環境問題「環境、アニマルウェルフェアを考慮した持続的食料生産」（近藤 直）
⑨English　文化政治学「日本の捕鯨：食と保護を巡る文化政治学」（若松 文貴）
⑩English　日本古典文学「日本古典文学に見る日本人の美意識」（湯川 志貴子）
⑪English　防災「ＴＢＡ」（多々納 裕一）
⑫English　日本の教育「学校教育にみる日本文化の諸相」（河合 淳子）

日本の社会課題を扱う講義、日本の文化や歴史に関する講義、本学独特の学問分野に触れつつ学際的な視点が得られる講義で構成される。専門外の内容やアプローチに触れることで専門における学修・研究の刺激となり得る内容となっている。

（２）日本語教授準備及び実習
日本語教授に関する準備講座を受講後、海外学生が学ぶ日本語学習科目において、日本語教授実習を行う。これにより、本学学生は、言語教育方法のスキルに触れ、その習得への端緒となる経験を積むとともに、自分自身が身につけてきた言語を客観的に捉え、日本文化や日本社会への理解を深める。

（３)共同学習・討論会・最終発表
参加学生は、海外学生との共同学習を通して準備を行い、様々なテーマについて討論会を行う。最終発表は、ILASサブプログラムでは海外学生による個人発表に対する質疑を英語で行う。KUASUサブプログラムでは本学学生と留学生合同で編成されたグループにより日本語で行う。

（４) 実地研修・文化体験
地元企業や各種組織の協力を得て、実体験に基づいて（１）で学んだ点を確認し、日本文化、社会状況、日本的組織の特徴等への理解を深める。過去の実施例は、西陣織、京菓子（伝統の保全とイノベーション）、滋賀県立大学による研修（湖水環境、琵琶湖湖上実習）などがある。

■本学学生向けスケジュール（上記 本学学生向け受講申込み を確認のこと。）
・本学学生向けオリエンテーション　6月下旬～7月上旬に開催
（内、１回出席必須）
・日本語教授準備講座①～③（内、１回出席必須）　7月上旬に開催
・京都サマープログラム　7月下旬～8月上旬約2週間

多文化教養演習 ：見・聞・知@京都「受容から発信へ」(3)へ続く↓↓↓

多文化教養演習 ：見・聞・知@京都「受容から発信へ」(3)

（0日目）：海外学生向けオリエンテーション、キャンパスツアー、日本語プレースメント、
初日は試験期間と重なるため、海外学生のみ対象。
1日目：学術講義①、日本語教授実習①、議論・発表準備講座①、京大紹介①
2日目：学術講義②、日本語教授実習②、議論・発表準備講座②③、日本語で話そう①
3日目：学外研修（終日）企業訪問、関連講義、実習
4日目：学術講義③、日本語教授実習③、議論・発表準備講座④、研究室訪問I、日本語で話そう②
5日目：学術講義④、日本語教授実習④、議論・発表準備講座⑤、研究室訪問II、日本語で話そう③
6日目：文化体験（終日）史跡訪問、関連講義、実習
7日目：学術講義⑤⑥、日本語教授実習⑤、議論・発表準備講座⑥⑦
8日目：学術講義⑦⑧、日本語教授実習予備日、研究室訪問III、京大紹介②
9日目：学術講義⑨、⑩、議論・発表準備講座⑧、日本語教授実習予備日
10日目：討論会（必修）、学術講義⑪⑫
11日目：発表準備、最終発表会（必修）、修了式

２．最終レポート提出

[履修要件]

全学共通科目「日本語・日本文化演習」を受講した上での参加を推奨する。

[成績評価の方法・観点]

●出席・参加態度30%、小レポート10%（日本語教授準備講座・実習又は学外研修・文化体験等）、討論会への貢献30%、最終レポート30%。
●必修活動を含む、合計40時間以上の参加者を評価対象とする。必修活動とは、本学学生向けオリエンテーション２sessionの内１session（1時間）、日本語教授準備講座３sessionの内１session(1時間)、学術講義12コマの内８コマ、大学紹介２コマの内１コマ、討論会（10日目）、最終発表会（11日目）である。必修活動の多くは、土曜日並びにフィードバック期間後に実施される。ただし、本プログラムの各種活動がフィードバック期間と重なっていることに留意し、受講計画を立てること。

[教科書]

プログラム講義内、オリエンテーション等で指示する。

[参考書等]

（参考書）
プログラム講義内、オリエンテーション等で指示する。

（関連ＵＲＬ）

https://forms.gle/tjbsxAhqs8yFCKo98(昨年度例：本学学生向け受講申込み「京都サマープログラム2023」 - Google フォーム（募集要項・時間割・講義一覧は上記google formより閲覧可能。）)
https://www.z.k.kyoto-u.ac.jp/summer-spring-program/(京都サマープログラム　ホームページ)

[授業外学修（予習・復習）等]

受講する講義で指定される文献を読んでおくこと。

[その他（オフィスアワー等）]